

誰のために

石光眞清

龍星閣版



昭和三十四年十一月十日 印刷
昭和三十四年十一月十五日 発行
昭和四十年六月二十日 増補版
昭和五十二年八月一日 七版

定価 千五百円

著者 石^{いし}光^{みつ}真^ま清^{きよ}

刊行者 澤田伊四郎
東京都千代田区九段南四ノ八ノ三四

発行所 龍星閣

東京都千代田区九段南四ノ八ノ三四
振替口座東京三一三三六
電話東京二六〇九二七二

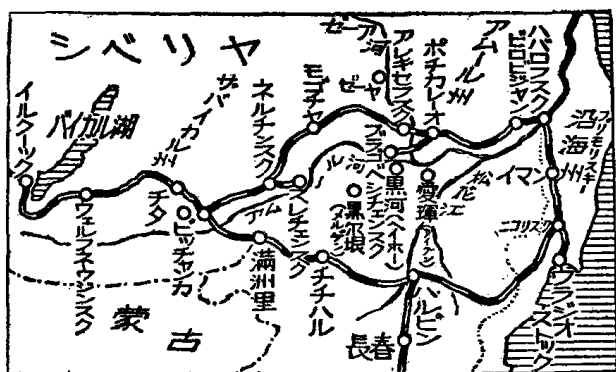
誰のため

石光真清の手記

目次

大地の夢	五
吊鐘	二
長い市民の列	四
粉雪と銃声	三
日本義勇軍	六
生きるもの・生きざるもの	一五
闇の中の群衆	一三

三月九日の朝	一五四
亡命	一七一
野ばらの道	一六七
再起の歌声	一二七
渡河	一四〇
分裂	一五五
誰のために	一七四
残された道	一九九



一、本書は故石光真清の大正から昭和にわたる手記で、さき上梓した明治篇『城下の人』『曠野の花』『望郷の歌』の三巻に続くものである。

一、各巻はそれぞれ独自の内容をもっているが、一貫して「ある男の一生」であることと、それがそのまま明治から昭和へかけての秘められた「日本の裏面史」であることに特異な意義がある。

一、本書は「石光貞清の手記」の最終篇である。なお他に尨大な謀報記録がある。

一、編者（嗣子石光真人）は、各巻の編纂にあたり、書名、章題、区分をすべて故人の手記によらず、文体、会話、地名などは出来るかぎり現代風にあらためた。しかしなんらの作意も私見もさしはさんでいない。

〔上図は当時のシベリア・北満要図・本文参照〕

大地の夢

一

長い旅路の末にようやく辿りついた安住の地にも似て……東京郊外世田谷村大字三宿（現在世田谷区三宿町）の田舎住いは、私の生涯における最良の日日であった。日日これ好日とは、このことであらうか。明治の末年から大正初頭にかけての頃である。

武蔵野の朝霧が白んで農家の鶏が鳴き交わす頃、街道には早くも市内の青果市場に急ぐ野菜の手車が長い列をつくり、始発の玉川電車（現在東急玉川線）が多摩川の砂利を積んだ無蓋車（トラック）を曳いて通る。私の家の裏庭から土手続きの近衛野砲兵連隊の起床ラッパが朝日を迎えるのも、それから間もなくである。

雀の群れ騒ぐ竹藪（ふくろう）と梟（けやき）の住む樺（けやき）の並木に囲まれて、ささやかな三等郵便局を電車通りに構えていた私は、早起きの顔を洗い歯ブラシをくわえ、門前に立って爽やかな生活の始まりを眺めるのが日課であった。郵便事務のあい間に、鍬を握り鶏を飼って百姓の真似事を楽しみ、一男三女に囲まれて家族愛に浸っていたのである。大陸の夢に破れて背負いこんだ借財も、どうやら小刻みに返済しながら、村の衆から「郵便局の旦那」として遇され、その頃発足した在郷軍人会支部の式典には、

カーキ色の陸軍歩兵少佐の古軍服を着て出席もした。紺の揃いのハッピ姿で鳶口を構えた火消し連中に訓示したこともある。

ありがたい国である。静かな時代でもあった。ここには天を掩う黄塵も捲きあがらず、緑の原野を食い尽す蝗軍いんぐの来襲もない。良民を大量虐殺する異民族の来寇もなく、農奴を鞭打つ貴族もいない。このようなありがたい国土をあとにして、思えば長い旅路であった。帝政ロシアの侵略の前に立たされ、軍留学生の身分を抛うって以来、二十余年の青春を大陸に捧げた。ある時は北滿の高梁コウリヤンの蔭を縫って馬賊と起居を共にし、またある年にはロシア軍の御用写真師になりおわせて、尋常ならぬ生活を歩み続けた。諜報の任務などは私が好んで求めた道ではなかったが、時のめぐりあわせというか、宿命というものか、あるいはまた私の愚直の故に招いた不幸でもあったろうか、気付いた時には歴史の裂け目に深く落ちこんでいて、人並の世間に這い戻ることもならず、妻子をいたわる力も失せて、早や五十の坂に近づこうとしていた。

この辛酸の旅路の末、この静かな東京郊外に小さいとは言いながら、珠玉のような平和を楽しんでいたのである。私の過去を知る人々は不思議に思いもし、また他目よそめには悟りすませている私の姿を疑いもしたろうと思う。けれども私自身不思議にも思わず、疑いもせずに日日を過していた。幸福だったのである。凡俗というものは、このようなものであろうか。痴人の悟りとはそのように浅くはかないものであろうか。自分の心底に潜むものさえ悟ることが出来ず、霞んだ眼には鼻の先に立ち塞がる運命の姿も見えぬまま、私はまたも生涯の転機に立たされていた。

大正四年八月の夕刻である。激しい雷雨に濡れて庭木の緑がひとときわ照り映え、農家の炊事の煙

が低く兩足に叩かれていた頃である。湯上りの裸のまま縁にあぐらをかき団扇を使いながら、私の魂は一つの想念に魅入られていた。

「いい機会ではないでしょうか。兄さんもご苦勞ばかりされて、このままお過しになるつもりはないでしょう」

今しがた別れた弟真臣の陸軍砲兵大佐の軍服姿が臉の裏に映っていた。

「さあねえ、大陸では性慾りもなく失敗ばかり繰り返えしてさ、お前にも随分迷惑をかけた。忘れてはいないよ。母上にも、妻子にもまだ償いが済んでおらん。だがこうしているのが一番よい償いじゃないかと思うてね……下手に動けば、また迷惑をかけやせんかと、近頃はすっかり臆病者になったよ」

「ですが兄さん、あの頃とは情勢が、すっかり変わりました……」

弟真臣は、前年の八月日本も同盟国の一員として参戦した世界大戦（第一次）のさ中にも相変らず内部抗争を続ける滿支の情勢と、大陸における日本の地位がようやく米英仏に対抗出来るまでになりつつあること、またこの大戦中に地位の強化を計らなければならないことなどを説いて、私の再起を促がしたのである。再起の資金は弟真臣の妻鶴子の実兄橋本信次郎が出すとのことであった。

当時の大陸の情勢について私は知らないわけではなかった。新聞の僅かな記事からでも筋書は大体読めたのである。清朝没落の後各地に革命軍が蜂起して大動乱の兆があり、ようやく孫文を大總統に推戴する臨時政府が南京に樹立されて、国号を中華民國と改め、黄竜旗を廢して五色旗を掲げたが、間もなく旧軍閥を背景とする袁世凱が共和政体を宣言するに至ったので、孫文は事態を円

滑に收拾するため、彼に地位を譲った。これによって南北支那の統一は辛うじて保たれたが、政党の簇生と軍閥の割拠が前途多難を思わせた。この間に各国の政治的介入があり、政客の暗躍があり、袁政權は財政と軍備の強化を急いで、矢継早やに各国から借款を仰いだ。まず英国、ベルギーから次いで日本を加えた六ヶ国から、引続いて再び英国から、またアメリカを除く五ヶ国からというように、各国の勢力が複雑に大陸に滲透して行った。このようにして成立した袁世凱政權はやがて民主革命派に弾圧を加え始め、第二次革命が起ったが、敗れた孫文が日本に逃れ中華革命党を組織したのが大正三年七月であった。その月に世界大戦が起り八月に日本も参戦、そして九月に日本軍は山東に上陸、英国軍と協力して青島のドイツ要塞を包囲し、海軍は南下してドイツ領南洋諸島を占領したのである。

世界大戦は日本に永年の夢を実現する機会を与えた。というのはドイツは山東省、英国は長江流域、ロシアは東三省、フランスは広東、広西、雲南を中心に、いずれも一八九七年（明治三十年）から翌年の一八九八年にかけて独占的な特殊權益を獲得し、これを根拠に触手を拡げつつあった。当時日本は僅か福建省沿岸の第三国への割讓禁止の条約に成功しただけであった。わが国としてはこれら欧米諸国による永年の支那大陸植民地化の歴史に、自らも進んで太い杭を打つべき機会が来たのである。あわせて大ロシア帝国の脅威に対して滿蒙に防衛地帯を設け、躍進的發展を遂げようとする日本産業の原料市場と消費市場を安定させようと策して、翌大正四年一月、旧ドイツ權益の讓渡、ロシアから讓渡された旅順、大連の租借權、南滿鐵道利權の延長、中国沿岸港湾諸島の第三国への割讓禁止、政府機關への日本人顧問の採用、要地警察權の共同管理など二十一ヶ条の要求を袁

世凱大總統に提出したのである。各国勢力の均衡の上に立つ袁政府がこれに易々と応ずるはずもなかったし、欧米諸国が大戦に忙しく東洋に手が廻らない隙を狙っての政策であったから、ひどく關係各国を刺戟したのである。過去三百年にわたって欧州諸国が東洋で強行した植民地化の手段に比べれば、それほど暴戾なものではなかったが、従来外交政策において極めて消極的であり潔癖であった日本が、遅ればせに欧州諸国の帝国主義的侵略の下手な模倣をしたわけである。東洋に有色人種による有力な指導国家が現われることを欧米諸国が歓迎するはずがないのだし、また、このように中国の面子を丸潰れにするような露骨な方法は避けるべきであつたろう。

「郵便局の旦那」として狭い農村に暮らしていた私に、當時の上層の考え方がわかるはずもないが、袁世凱政府は予想されたように各国勢力均衡の破綻を防ぐために英米仏に働きかけ、国内に対しては排日救国を叫んで反袁的民族革命の鉦先をこれにすりかえようとした。この政策は成功するかに見えた。まずアメリカ政府は大陸における自国利権の保全と門戸解放、機会均等主義を主張して日本に抗議し、英国もまた日本政府に説明を求めて牽制に出た。排日救国運動は各地に起り、日本商品ポイコットの波紋がひろがった。こうして五月ついに最後通牒を發して新日華条約が妥結したのであった。これを機会に袁世凱は共和制を棄て、自ら帝位に就き地方軍閥を押えようとしていた。このような情勢にあるとき、弟真臣は私に再起を促したのである。

「手まわしが良すぎて気を悪くされるかも知れませんが、実は会社設立の趣意書や関東都督府への資金援助願は準備出来ています。都督府關係の意向も打診済みです。日露戦役後は、まだ万事整わずで、本当にお氣の毒でしたが、今度は大丈夫です。ご安心下さい」

「さあねえ。大陸での御用はもう納めたものと思つていたんだよ。連絡船に乗ることは再び無いと決意して戻つて来たし、こうして足かけ六年も百姓風情の暮しをしたら、どうも、この方が性に合っているらしいと悟つたよ」

弟真臣は当惑して笑つた。笑いながら、複写紙に書いた関東都督男爵中村党大将宛の「錦州商品陳列館創立許可陳情之件」をテーブルの上に置いた。

「兵隊が書いたので、良い出来ではないが、橋本信治郎も賛成だつた」と言つた。陳情書にはこう書いてあつた。

「拙者儀曩日遼西及東蒙各地ヲ視察候処、南滿各地ニ比シ邦人ノ施設甚ダ振ハザルヲ実見シ軫タ感慨ニ堪ヘザルモノ有之候。折柄過般日支新条約ノ締結ハ同地方ニ發展セシムル關鍵ニ外ナラズト信ジ此際非才ヲ顧ミズ錦州ニ商品陳列館設立ヲ思立候。然レドモ本業ノ如キハ当初徒ラニ費エ多ク収益之レニ伴フ能ハズ。素ヨリ多少ノ損失ハ忍バザルベカラズトスルモ聊カ国家ノ体面ニモ関スル経営ニ候ヘバ一私人ノ能クスル所ニ無之、殊ニ陳列品ノ蒐集ニ就テハ官憲ノ援助ヲ借ルニ非ラザレバ頗ル困難ニ候間之レヲ貴府ノ保護若クハ出資事業トシ創立ニ対シ拙者ノ出資金壹万円ニ差繼ギ初度金式万円及爾後五ヶ年、年金五千元ノ御補助相仰度何卒特別ノ御詮議ヲ以テ御聽許被成下度別紙創立主意書並ニ経営綱領、陳列館定則案相添ヘ此段奉願候也。

追テ本件ニ関シ説明ヲ要スル向モ有之候ハバ何時ニ係ラズ出府可仕申添候」

この陳情書には詳細な趣意書と目論見書がついていた。ざっと眼を通してみたところ、すでに専門家の手を経たものらしく、形式の整つたものであつた。滿蒙貿易公司の本社を東京に置いて社長

を橋本信次郎名義とし、錦州に商品陳列館を設けて私を駐在させ、専務取締役として経営を委任するといふのであった。当時の私には自活の能力はあっても、事業に投資する余裕などなかったし、辛酸を嘗めた大陸に再び渡るのがなんともおっくうに感じられて、すぐ応諾する気にはなれなかったのである。

「考えてみよう。御親切はありがたいが、辰子（妻）にも母にも相談する必要があるし、これまでも夢にも思わなかったことだからね」

「一日を争うことではありませんが、競願者が現われるといけませんので……」

「僕は百姓だから、軍人とは違ってね、はいっと言って応ずる気にはなれないよ」

私も弟も一緒に苦笑し、再考を約して別れた。軍服姿で汗だくの弟を送り出してから、風呂を浴びて風鈴の鳴る縁側に、湯上りの裸であぐらをかき、夕立の庭を眺めながら雨の音に聴き入った。松の梢を掃く雨、八ツ手の葉を叩く雨、竹林をゆさぶる雨風……その頃の私はそれらの趣きを聴き分ける心境になっていた。このように悟り澄ましたつもりでいたが、この日弟から誘いを受けると、胸の底でこだわるものがあつた。

賑やかに妻と子供たちが湯殿から出て来て、濡れ光る髪をそのままに縁に集って来た。

蚊遣りを焚き、切られた赤い西瓜がお盆の上に並んだ。かいこが桑の葉を食べるように、子供たちが赤い果肉に小さな口をつけて忽ち平らげてしまふ姿を眺めながら、子供たちの将来をあらためて考えてもみた。あと十年したら、一人息子は二十一歳……この歳ではまだ社会に出ていない、十五年したら二十六歳、無事に成長していれば何かの職業に就いていよう、娘たちは皆嫁いで、四人

の婿たちは、良い相談相手になるだろう。その頃私は還暦を過ぎるが、どうやらそれまでは生きていられそうな氣もする。孫も幾人かになっているに違いない……子供たちを社会に送り、そして子供たちの厄介にならずに暮すことが出来れば、まずこの世では最上の晩年ではなかるうか……と、心の隅から一つの声が私に自重をすすめた。このまま静かな生活に終始することが結局は妻子にとって最上の幸福であり、お前に残された義務でもあると教える。だが一つの声は、それとは著しく調子のちがった囁きであった。

「世間は変わりつつある。日本はお前が青雲の志を抱いた頃の弱小国から、一等国の列に加わろうとしている。植民地化された東洋諸国の指導者になるには程遠いかもしれないが、いずれはその道へ進むことは明らかだ。お前は人生五十の限界に近づいたと言うが、働き盛りではないか。そう思わないか？ お前の弟は近く少将、中將の出世コースを急ぐだろう。お前の妹たちの主人も、それぞれの職業で花道を歩んでいる。現在すでに生活程度に差が出来ており、お前の妻は口には出さないだろうが、親戚付き合いにも苦労している。物心両面の苦勞である。お前はそれを知りながら知らん顔をしている。悟りすましたつもりでいても、そんな悟りは偽物だ。悟りどころか迷いの一種だよ……さあ、後悔しないうちに目を醒ませ。この機会をとり逃がすな。お前に残された人生は短い。母や妻子に償いをする時が来たのだよ」

その夜、寢床についても、さまざまな声と幻影が交錯して頭が冴えた。

私の寝ている蚊帳の中には、妻子が静かな寢息をたてていた。柱時計が午前一時を打ち、迷い込んだ甲虫が羽音をたてて天井や襖にぶつかり、畳に落ちてはまた飛び立つのを聞きながら、

「ご無沙汰しているが……参謀本部の田中義一少将に相談してみよう」と考え……眠りの闇に落ちこんだ。

二

滿蒙貿易公司の錦州商品陳列館が開店したのは、それから一年二ヶ月後の大正五年十月であった。先輩からも、母、弟妹からも、このように激励されて大陸に渡ったのは初めてである。妻も心から喜んで送ってくれた。

その頃の錦州は未解放区で外国人の居住、営業は禁止されていたから大変な手数がかかった。この都市は昔から遼西の首府で、海陸両方面の交通の要点であり、蒙古の各市場の門戸であって、蒙古市場の中心地である赤峰の物資は殆んど錦州を経て取引されていた。

主な物資は毛皮類と藥草で、錦州で取引される数量は春羊毛二百万斤、秋羊毛八十万斤、羊絨五十万斤、雜毛二十万斤、羊皮二十万枚、山羊皮五万枚、牛皮六万枚、犬皮二十万枚、雜皮十五万枚、甘草二十五万斤で、赤峰以南の生産量はこれに倍するものがあり、中国商人と欧米商人が直接現地で買取っていたから錦州で取引されているものはその一部に過ぎなかった。このように重要な地点であったから、支那大陸における最大の利権国である英国が見逃す筈はなく、錦州から赤峰に至る錦赤鐵道の敷設を計画し、その第一歩として錦州から朝陽に至る錦朝鐵道の敷設権を秘かに獲得していた。たまたま世界大戦にあって着工が遅れていたのである。錦州には日本人は売藥業者が十数

名いるだけで、ここを足溜りに貧しい行商をしていたが、この売薬業者に対してさえ官憲の圧迫が厳しく、しばしば立退きを要求され暴力沙汰が繰返されていた。関東都督府では彼等の訴えによって参謀少佐吉村綱英を派遣したが、官憲は吉村少佐の駐在を認めず、一旅行者として扱い、護衛の名目で警吏に監視させ、しかも県知事をはじめ警察長は面会を謝絶していた。このような日本人圧迫の背後に英国の策動があるように觀察された。こんな情勢であったから、日本人の名義による貿易会社設立などは考えられないことであった。

この計画に関東都督府が創立資金一万四千五百円を支出し、創立後十ヶ年の間、毎年三千円ずつの補助金を交付するという好意を示したのは、田中義一中将の口添えや、当時都督府参謀長で私の同期生西川脩次郎少将、民政長官白仁武などの尽力もさることながら、英国の利権侵略に対抗しようとする日本の基本政策に合致した計画だったからであろう。

私のように権力を背景にしないで、市井の一商人として十年もシベリア、満洲に暮し、上流から下流まで各階層の人々の心理に通じたつもりでいても、錦州に入りこんでは身動きが出来なかった。土地も売ってくれず、家も貸してくれず、朝から晩まで警吏がつき纏っていた。それでも私は諦めなかった。支那旅館に泊りこんで毎日歩き廻り、交渉を続けた。二ヶ月たち三ヶ月たち、やがて六ヶ月にもなろうという日のこと、馬車を雇って狭い街路を行くと、向うからも馬車が来て、向いあったまま動けなくなった。丁度その場所が狭くてすれ違えないのである。乗っていた私は、じっと様子を見ていた。馬と馬が鼻を突き合せたまま、馬夫も馭者台に腰かけたまま知らん顔で向い合っていた。おそらく親方を異にする競争相手であったろう。それにしても少々我慢が出来なくなっ